

女らしさは...

◆日本の女性に期待されている「女らしさ」を端的に表現しているもの一つに歌謡曲があります。寿岳章子さんの分析によると、女性は「待ったり」「泣いたり」「耐えたり」しながら恋をし、困難な状況にであうと「弱い女」「バカな女」「女なんだから」と、自分にレッテルを貼り居直ってしまう、単純に言えば、うたの中の女のキーワードは「待つ」事だということです。

昔の女じやあるまいし、今の女たちはもっとたくましいという声が聞こえてきそうです。確かにうたのことばは、女性の現実をそのまま投影してはいないのですが、ことばは私たちの意識の有様と深くかかわっています。たとえば「夫」を何と呼ぶかは、何度もむしかえされた議論ですが、今だに公的な場では「主人」がまかり通っていて、仲間内では「じゅん」などと素敵に言っていた人が、所変わればたちどころに「主人」となってしまう現実は多々あります。

「主人は子供とよく遊びますが、やさしいだけではなく、しつけも私より

厳しくて、台所なんか男の子の入ってくる所じゃないって」といった男子厨房に入るべからずの思想が、「主人」を持つ彼女の中に脈々と生きているのです。

しかし、「主人」というよび名に疑問をもつ人が増えてきているのは、男女のかかわり合いの多様化を反映しているのでしょうか。夫婦げんかの明くる日など、たまには「主人」という呼び方をやめ、「夫」とか「つれあい」とか、ことばを先取りして心に波紋をひろげてみるのも楽しいものかもしれません。

——*——*——*

◆「女は人間なのか？」などという物騒な疑問を投げかける人がいます。言われてみれば、欧米の言語では「人」を指すことばは、同時に「男」をも意味している場合がほとんどです。なるほど、してみると男は人間なのです。しからば女は？ というのは、そう突飛な議論でもないのかもしれませんが。

人の誕生における男と女の分岐点はその辺にあるのでしょうか。それは受

精後六週間を越えてから、という所まで最近の医学ではわかっているそうです。つまり、そこまでは男でも女でもなく、いわば両性の可能性をもった「人間」という存在だというわけです。

しかし、社会の一員として生まれ落ちた瞬間、まず男女が峻別され、その性別によって「らしく」育てられ、女（男）に成長していきます。遊び、ことばづかい、立居振舞い、教育、化粧、服装から職業まで、一口に「文化」と称されるものすべてが「らしさ」の伝統を守り育ててきました。この伝統的な「らしさ」に対し、ある時から私たちは抗議を始めました。「らしさ」の押しつけは「人間」への差別だ、というのがいわゆるウーマン・リブの基本的な主張でした。

今、時の流れの中で、一見、男と女の「らしさ」の壁には無数の風穴がある。きはじめたようです。と同時に、私たちは新たな女らしさ、新たな男らしさの確立という課題を背負ったのではないのでしょうか。

婦人のための事業紹介

勤労婦人福祉

企画推進事業

労働福祉課

勤労婦人の総合的な福祉対策を調査研究するため、本年度は次のような事業を実施しています。

◆勤労婦人福祉問題懇談会

・委員

坂本重雄 静岡大学教授（座長）ほか五人

・テーマ

婦人パートタイマー問題について審議をすすめ、本年度末までに県に対して婦人パートタイマーの福祉対策について提言を出す予定。

◆婦人パートと語る会

県下六会場で開催する婦人パートタイマーの話し合いの場を通して、その就労の実情などを把握し、懇談会の提言に反映させる。

県では、この懇談会の提言をもとに、婦人パートタイマーの福祉に関する施策

を企画、推進していくことにしています。

婦人の将来像を

考えるシンポジウム

― 婦人対策室 ―

二十一世紀に向けて、様々な社会環境の変化の中で、女性はどのような生き方を選択し、どのような社会的役割を担っていったらよいのかを多くの人と共に考えていくため、次の県下の五会場でシンポジウムを開催しています。

◆これまでに開催した会場

- ◎開催地 清水市
- 開催年月日 昭和五十七年七月八日
- サブテーマ 二十一世紀の豊かなしみをめざして私たちは
- ◎開催地 掛川市
- 開催年月日

昭和五十七年七月二十五日
○サブテーマ これからの女性の生き方と生涯学習

◎開催地 伊東市

- 開催年月日 昭和五十七年九月八日
- サブテーマ 豊かな自然環境を生かして活力ある伊東をめざして

◎開催地 島田市

- 開催年月日 昭和五十七年九月十日
- サブテーマ 婦人の自立と将来を考える

◆これから開催する会場

- サブテーマ 浜松の産業と文化をつなぐー女性の視点・女性の参加
- 開催年月日 昭和五十七年十一月二日（火）
- 開催年月日 午後一時～四時

会場 浜松商工会議所ホール

講師

- ・コーディネーター 三浦優美子（テレビ静岡アナウンサー）
- ・地域社会から 栗原 勝（浜松市長）
- ・経済社会から 河合 滋（浜松商工会議所会頭）
- ・婦人問題から 佐藤 欣子（リビングマガジン研究（所）取締役所長、弁護士）

家庭婦人海外派遣事業

― 婦人対策室 ―

外国の家庭生活の体験、現地の婦人との交流を通して、広い視野を持った婦人リーダーを養成することを目的として実施しているものです。本年は第三回目に当たり、一年おきに実施しています。団員は帰国後、各地で報告会を開くことになっています。あなたのグループでもぜひ聞いてください。

日程 九月二十一日～十月十三日（二十三日間）

訪問国 西ドイツ・スイス・フランス・イギリス・アメリカ

研修テーマ 住みよい地域づくりに果たす家庭の役割

（昭和五十七年度）

静岡県家庭婦人海外派遣団員

団長 芦川 緑

顧問 ビエール・ロバート

- 団員 高木ゆたか（賀茂村）、河村智章（熱海市）、大野洋子（沼津市）、室野英子（修善寺町）、杉山良子（中伊豆町）、関 豊美（清水町）、望月秀子（芝川町）、松尾真知子（静岡市）、橋爪千恵子（静岡市）、山本道子（藤枝市）、長谷川幸子（吉田町）、山下とし子（中川根町）、落合艶子（浜岡町）、吉田隆子（磐田市）、鈴木可奈子（森町）、安間千恵子（浅羽町）、松下允子（竜洋町）、山中シツ（可美村）、水谷洋子（新居町）、外山妙子（三ヶ日町）



掛川会場



私のみた

アメリカの婦人

渡辺芳枝



クラフト教室の仲間と(中央渡辺さん)

テレビや雑誌等でレーガン米大統領の活躍ぶりを見ておりますと、多くの場合そのそばにナンシー夫人が付添っている様子が見受けられますが、私も日本人が外国へ行ってまず驚くのは、地域社会あるいは主人の仕事の關係で社会的交際が非常に多く、またそれが極めて重要であることです。

はじめ、私も言葉の問題もあって非常に戸惑いました。しかし、北米の人々は小さい時からいろいろなパーティーで人をもてなすことをトレーニングされているので、男女を問わず他人をもてなすことが非常に上手で、言葉のできない私どもでもほんとうに楽しくグループにとけこむことができました。

また、家族や友人同士の交流も盛んで、気軽な気持ちでお互いに訪問したり、泊まったりします。日本ではお客様が何人も泊まるような場合、主婦は大変気を遣います。北米ではお客様を家族同様に扱って食事なども大げさな事はせず、週末を皆で楽しく過ごします。

お金の使い方にしても、最小の出費で最大の効果ということに頭を使います。感心させられたことは、学校や地域の不用品交換会を最大限に利用することです。寒い地方ですので、子供の

防寒着、ホッケーやスケートの靴、スキー道具等に随分費用がかかります。それに成長期には、毎年サイズの違った衣類や靴等を買ひ替えなければなりませんので、この交換会を利用することで家計が大助かりします。

北米の人は、子供の成長とともに気軽に家を替える人が多く、そんな時、ガレージセールと言って不用品を家の前に並べて安く売ります。地域の人もそれを見に行くのを楽しみに行きます。

お金の上手な使い方ということにおいては、バケーションの過ごし方もその一つです。日本ではどちらかというと移動型旅行で、行くことが目的であるのに対して、北米では滞在型です。行った先に長期滞在してお金をかけずにのんびり休養するのです。飛行機代、ホテル代にしても、半年や一年も前からスケジュールを考え、安く上手に行く方法を検討し、効率のよいお金の使い方をします。金銭感覚がすぐれ、すべてに打算的かと言うとそうではありません。

宗教的な影響が非常に大きいと思いますが、ボランティア活動への積極的参加という面ではとても比較になりません。例えば私どもの子供が現地の小学校に転入した時、校長先生が学校や

地域の人達に「英語のわからない子供が転入して来ました。だれかこの子に英語を教える手助けをしてくれる人はありませんか」と伝えたところ、何人の婦人がやりましようとして申し出てくれました。おかげできわめて短期間に学校にとけこむことができました。私も何か恩返しをしなければと思ひ、言葉の不自由な私でもできる図書館の仕事を手伝わせてもらいました。

幼稚園の助手をしたり、福祉団体でタイグを打ったりというボランティア活動は、そこでの経験を生かして、再び就職する際には、自分の能力を少しでも高く評価されるためのトレーニングを兼ねている場合も見られます。日本では子供が大きくなってきて、手がすいたから再就職、と言っても、自己啓発を怠っているためにレベルの低い仕事に就かざるを得ないケースが多いようです。高齢化社会を迎え、働く婦人が増加しつつある日本の将来を考えますと、北米の婦人達の自己研鑽に努める姿は、婦人の地位向上のためにもぜひとも見習わなくてはならない大事なことと思ひます。

筆者は、ヤマハ発動機株式会社海外事業本部長渡辺敏氏夫人。アメリカ・カナダ在住十年、現在浜松市在住。

はじめまして



周智郡森町

あけぼのグループ

春塾山から流れ出た三倉川、大日山から流れ出た吉川、この二つの川が合流して太田川となるあたりに、森町の約四分の一にあたる平地が広がります。このあたりの平地は今青々とした水田ですが、米作が終わった晩秋から春にかけては、一面のビニールトンネルをかけたレタス畑と化します。

☆ ☆
レタスは森町のドル箱ですが、きっかけを作ったのは十二名の主婦の集まり「あけぼのグループ」です。

婦人の力で

レタスの産地化へ!!

四十歳半ばから五十歳代の主婦によって構成される「あけぼのグループ」が結成されたのは昭和三十一年。当初は三十八名という大所帯でした。その頃は麦・菜種を作っていました。が、三年続きの不作のため、現金収入を得る方法はないものか、女にだって何かできるはず——と気の合った仲間が集まりグループを作りました。

レタス栽培を始めたのは翌三十三年。当時レタスはなじみが薄く、ハイカラな西洋野菜くらいの知識でし

た。そこへ復員してきた旧軍人さんから、敵国だったアメリカの野菜を作るなど反対されたこともあり、最初はかなり勇気が必要でした。今まで作っていた野菜の価格が下がったり、不作だったりしたこと、生野菜に対する関心が高まってきたことなどタイミングがよかったことや、作り易く種も安いという好条件に恵まれて、当時周智農業改良普及所指導員だった高木忠男さんの指導のもとにレタス作りに踏み切りました。

☆ ☆

レタスが商品化されたのは昭和四十年。その間の七年は大変でした。グループの資金づくりのため、農業の合間に共同でじゃがいもをつくって売り、夜は集まっていたの勉強会。そのため夜家を空ける事が多くなり、家族から非難を浴びる人も出て、仲間が一人減り二人減りしていきま

した。「姑も主人も農業学校出のせいが大変理解があり、若いうちは好奇心が旺盛だから何でもやってみるとい

ってくれました」と語る佐野福子さんのように、理解ある家族を持った主婦十二名が今も活動を続けています。

二つのダンボール箱にぎっしり、発足当時の記録が詰まっています。血のにじむような記録です。このように数かずの苦労を重ね、全国的に名の通った「森レタス」の先鞭をつけたのは、平凡な主婦達の勉強熱心と熱意でした。

☆ ☆

現在、森町のレタス栽培農家は二八〇戸。耕作面積二〇〇ヘクタール。年間販売高約十一億円。全国有数の産地です。

☆ ☆

男の世界である生産の場に女が入っていき、しかも男に負けない立派な結果が得られました。この女達だけでやり通した底力、たくましさは一体何であったでしょう。男に頼ろうという気が全くなかったからでしょう。彼女達の生活力、バイタリティーの源は、「女にだってできるんだ」という気概につきるようです。私達女の力も団結することにより大きく開花し、社会を築く歯車の一つに十分なり得るのです。趣味・教養的グループ活動だけでなく、地域の発展に貢献するようなグループ活動の展望が開けたように思いました。

ねっとわあく編集員



柳谷 淳子(48)
五人の編集員のま
とめ役。主婦業の
かたわら児童相談所で青少年問
題・福祉問題などに取り組み、地
域活動に力を注ぐ。自らの豊富な
経験を生かして、地域社会におけ
る女性を書いていきたいと意欲満
々。



和田 紀子(47)
職場では女子社員
教育のインストラ
クター、社内報の編集に活躍。女
は夫からも子供からも精神的に自
立し、ライフワークをしっかりと
持つべきであるというのが持論。
民間企業からのただ一人の編集者。



山形美恵子(36)
結婚し子供を持っ
てみて、初めてみ
えてきた女の状況。夫と子供二人



大国田鶴子(36)
子育ても一段落。
内から外へちよっ
と視線の方向転換。専業主婦とい
うぬるま湯から脱け出し、もつと
社会参加しましょうと、この誌上
を通じ世の女性に呼びかけたい。



川辺 延子(31)
高校教師をやめて
一年、家庭にあり
ながら女の自立を考える。今は編
集・二月出産と大忙しの充実した
毎日。山本知事提唱の母乳運動に
共感。母と乳幼児のふれあいを掘り
上げてみたいとファイトいっぱい。

「ねっとわあく」はみなさまの情
報誌です。創刊号は少し大上段に振
りかぶりすぎたとの反省もしていま
す。次号からはみなさんの身近にあ
る新鮮な話題や、日ごろの生活の中
で感じていることなどをとりあげて
いきたいと思えます。どうぞ、情報
やご意見をお寄せください。

あとがき

*「いい女」、「女らしさ」、「理想の女性」とは何か、婦人対策室の男性職員を交え、話の花が咲きました。考えてみると、これらの言葉はすべて男性の立場から、男性に都合のよいように勝手に女性を規定しているに過ぎないようにも思えます。

*現在のようない「男性社会」では、女性も男性のつくった殻をかぶっていたほうが生きやすいのかもしれない。男性を馬車馬のように働かせ、しっかりと手綱を握って、あとはカルチャーセンターでジャズダンスに興ずるのも、まんざら悪くありません。*しかし、女性が「天の半分を支え」、「男性と同等に、社会の発展と世界の平和に貢献」しなければならぬとするなら、男性のつくったいろいろな殻を脱ぎ捨て、「本性」を現わさざるを得なくなるかもしれませぬ。

*女性自身の手で女性の問題に取り組んでみたいと、はり切って応募した素人のなか編集員五人、知恵を絞った創刊号でしたが、自らの力不足を知り、反省しきりです。皆さまの暖かいご支援を得て、次号もがんばりたいと思えます。

表紙

静岡県浜松繊維工業試験場デザ
イン縫製研究室作成。
同研究室では、浜松市を中心と
する県西部地方に一大産地を形成
する繊維産業の発展の拠点として、
デザインの開発研究、流行基調色
やファッションの動向調査などを
行っている。

婦人のための情報誌

「ねっとわあく」 創刊号

昭和57年10月

編集・発行 静岡県生活環境部

県民生活課婦人対策室

〒420 静岡市追手町9番6号

電話 0542-21-2137